大津
歴博だより
1996
No.27
OTSU CITY MUSEUM OF HISTORY

シーボルト肖像画
ブランデンシュタイン・ツェッペリン家蔵

第15回企画展・シーボルト生誕200周年記念

◈シーボルト家の二百年展◈

10月2日(水)～11月10日(日)

本年は、大津市の姉妹都市ドイツ連邦共和国ヴュルツブルク市に生まれた、19世紀ヨーロッパにおける偉大な日本研究家、フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト（一七九六～一八六六）の生誕二〇〇周年にあたります。

これを記念して、本展覧会では、シーボルトの子孫ブランデンシュタイン・ツェッペリン家に伝来するシーボルト関係資料一三七件を中心に、一五九件の資料により、江戸時代末期にオランダ商館付医師として来日し、日本の医学等の発展に貢献するとともに、日本研究に一生をささげたシーボルトの活動と生涯をたどり、その功績を顕彰することとしました。

さらに、シーボルトばかりでなく、近代日本の外交に貢献した2人の子息、アレクサンダーとハインリッヒをはじめ、シーボルトの一族の業績もあわせて紹介します。

展示品は、シーボルトとその一族の肖像画や遺品など多岐にわたりますが、なかでも、若き日のシーボルトが、オランダ商館付の絵師らに描かせた日本の風景や日本人のスケッチは、江戸時代の日本の生活が身近に伝わってくる貴重な資料といえましょう。

なお、以上のほか、特別出品として、長崎市所蔵の「シーボルト妻子像螺鈿合子」（重要文化財）や、川原慶賀筆の「唐蘭館絵巻」の内「蘭館図」（重要美術品）、再来日時の娘いね宛書状（重要文化財）など、重要文化財一二点を含むシーボルト関係資料等二一件（二七点）も展示して、シーボルトの日本における足跡を詳しくあとづけています。

企画展の内容

☆展覧会は次のコーナーから構成されます。

(1)プロローグ
(2)生い立ち
(3)日本における活動
（特別出品）日本における生活
(4)日本研究
(5)日本の自然地理
(6)日本の住民
(7)江戸参府
(8)日本の産業
(9)日本の近隣　朝鮮
(10)日本の近隣　蝦夷・千島・樺太
(11)ヨーロッパにおける活動
(12)晩年と死
(13)ヴュルツブルクのシーボルト家
(14)シーボルトの息子たち
　アレクサンダーとハインリッヒ
(15)ブランデンシュタイン・ツェッペリン家

（休館日）10月7日・11日・14日・21日・28日
11月5日

主催　大津市・大津市教育委員会・大津市歴史博物館、長崎市、宇和町、保内町
後援　大阪・神戸ドイツ連邦共和国総領事館、滋賀県教育委員会、ＮＨＫ大津放送局

☆**主な展示作品**

シーボルト肖像画
ブランデンシュタイン・ツェッペリン家蔵

シーボルトの二女マチルデが、27歳の時に、亡き父シーボルトを描いたものと言われ、母ヘレーネの肖像画（オスカー・ペガス作）と構図や額装などが似ていることから、シーボルト夫妻の一対の肖像画を完成させるために作られたものと伝えられるが、定かではない。所蔵家の家宝とされており、日本初公開。

（表紙写真）

東海道　琵琶湖の景
ブランデンシュタイン・ツェッペリン家蔵

一八二六年（文政9）の江戸参府時に描かせたスケッチの一つ。石場の港の風景とみられる。大津には往路の3月25日（旧暦2月17日）に立ち寄り、湖岸の茶屋の見晴らし台から湖上の景色を楽しんでいる。なお、復路の5月31日（旧暦4月25日）にも大津に立ち寄り、瓦工房を訪ねている。

シーボルト使用の携帯顕微鏡と卓上ルーペ

ブランデンシュタイン・ツェッペリン家蔵

顕微鏡はケース付きで5㎝強の小さな物。野外での観察などに持ち歩いたものであろう。また、ルーペは、収集した地図類を筆写したりした際、細かい部分の確認のために利用したものであろう。シーボルトの日本における旺盛な研究活動がうかがわれる遺品である。

こまき（熊吉?）

ブランデンシュタイン・ツェッペリン家蔵

シーボルトは、日本人の人種的特徴を研究するために、研究資料として、身近な人々の肖像をスケッチさせている。これは、その一枚で、召使のこまき（熊吉の誤りか?）の肖像画。こまきは、シーボルトの命で植物標本や獣皮の作製を手伝っていた。

重要文化財　シーボルト妻子像螺鈿合子（らでんごうす）

シーボルト記念館蔵

シーボルトの妻「たき」と娘「いね」の肖像を蓋の表と裏に描いた、青貝細工（螺鈿）の喫ぎ煙草入れ。一八二九年（文政12）のシーボルトの日本追放後、妻のたきが、バタビア（ジャカルタ）のシーボルトに贈ったもので、たきといねの頭髪など8種の形見の品が納められていた。

学芸員のノートから⑤

大津祭曳山成立についての覚え

先ごろ終了した企画展「大津祭」の準備を進める中で、従来充分検討されてこなかった問題に取り組むことになった。例えば、曳山を飾る装飾の一々についての検討や、各町に残された曳山修復関係資料の検討、曳山からくりの背景やかつての動き、などモノを展示することから生じる問題である。展覧会は、先学の成果や識者のご指導によりなんとか形を整えることができたが、多くの未解決な問題を発見する場でもあった。ここでは、大津祭の成立について考えた一端を報告させていただく。

この曳山の成立は、寛永十二年（一六三五）の「曳山由緒覚書」（西行桜狸山保存会）や文化年間に整理された『曳山永代伝記』（大津祭曳山連盟）によってその経緯を知ることができる。

慶長年間、四宮社近くの鍛冶屋町に住む塩売治兵衛が、ある年の祭礼の折、境内で狸面をかぶり、木遣音頭に合わせて踊ったところ大変な人気であった。翌年も踊るようになり、その翌年からは竹の屋台に治兵衛を乗せて町内を舁歩くようになる。元和八年（一六二二）には、高齢となった治兵衛に替わり、腹鼓を糸からくりで打つ狸の人形を拵え乗せるようになり、寛永十二年には地車を付け曳き歩くようになる。そして、寛永十五年に祇園祭鉾を真似た三輪の山を建て曳き渡すようになったという。

大津祭の曳山は、寛永十五年に現在の曳山の原形が成立したと考えられる。三輪という大きな特長は、この時からのものであるが、一方で祇園祭鉾の影響も受けてもいる。また、からくりについての記述は見られないが、狸の腹鼓を打つ糸からくりから発展していることを考えれば、当初の曳山から乗っていたと見るべきで、これも祇園祭にはない特徴といえよう。

曳山が成立して間もない頃、寛文二年（一六六二）に京都で刊行された中川喜雲著『案内者』（『民間風俗年中行事』所載）には、次のように大津祭が紹介されている。「大津四位祭」として「此の神事近代奇麗になりにたり、湯だて・殺生石・狸の腹鼓三つの山をつくりわたす、みな人形をからくりにてはたらかす、その他に傘鉾・ねりもの・つくりもの・母衣具足、さまざまおもひおもひいでたち奇麗をつくし御こし一社をまつる」とある。『曳山永代伝記』によると、この時期七基の曳山が成立していたことになり、中川喜雲の記述は伝聞をもとにしたと思われる。ただ、大津祭が最近綺麗になったことが京都でも評判だったようだ。綺麗になった点は、曳山のからくりが最も目を引いたのであろうが、傘鉾やねりものなど美しい祭礼絵巻が繰り広げられていたようである。『牽山永代伝記』の記述では知れない、当時の祭礼行列の様子を伝える貴重な資料といえる。

『案内者』にみる曳山祭礼

この中川喜雲の『案内者』は、年中行事に関する考証と京都周辺の年中行事を簡単に紹介した案内書である。民間の行事も取り上げた類似書の中では最も早い時期に編まれた作品といえる。もちろん取り上げられている祭礼を一々見て回ったとは考えられず伝聞も多く、見落としも多いと見られるが、祭礼の様子を短文ながら伝えている点で貴重である。同書には大津祭の他にも曳山祭礼が取り上げられているが、その数はけっして多くない。近世初頭に成立した曳山祭礼は、祇園祭を除けば限られた数であったことを想像させる。『案内者』が取り上げている曳山祭礼は、尾張名古屋権現祭・天満天神御祓・伊勢桑名春日祭・敦賀祭そして大津祭である。これらが当時の曳山祭礼すべてを伝えている訳ではないが、京都周辺の大雑把な傾向を知ることはできる。

これらの内、大阪・名古屋の大都市を除くと、伊勢・桑名・越前敦賀そして大津と、いづれも港町として栄えていた所に曳山祭礼が誕生していたことになる。

近世前期、地方都市祭礼に曳山を登場させた所が、畿内周辺の港町であったことは興味深い問題である。こうした土地に、曳山を生み出す経済力と、新たな文化を生み、それを支える土壌が形成されていたと想像させるからである。

近世も中期になると各地に曳山が出現してゆく。近江の場合、子供歌舞伎で著名な長浜祭に曳山が登場するのは、一八世紀と言われ、水口祭では享保二十年（一七二五）、日野祭では享保二年（一七一七）以前とされる。江戸の天下祭に江戸型と呼ばれる曳山が登場するのも一八世紀になってからである。このように一八世紀になると、曳山は都市祭礼の花形として各地に見られるようになるが、近世前期ではまだ限られた地域でしか見られない新たな祭礼の装置だったようである。こうした曳山祭礼の原点に京都祇園祭があったことは確かであろうが、地域独自の展開も見逃すことはできない。

名古屋権現祭の曳山成立事情と大津祭

曳山が登場する過程が伝えられている所として、名古屋権現祭がある。元和四年名古屋城三の丸に祀られた権現社の祭で、名古屋三大祭にも数えられる行事であった。この祭にはじめて山車が登場したのは元和五年（一六一九）下七間町からである。『張州雑志』には「元和五年西行桜の人形を大八車二輌組ミ其上に飾り出せしとなり」という姿のものであったが、翌年には橋弁慶の人形に替わり、からくりで動くようになる。この頃の山車は、屋根もない単純な姿だったようだが、万治元年（一六五八）には、唐破風の屋根を乗せる現在名古屋型と呼ばれる山車が登場する。当初大八車に人形を乗せるという簡単なものであったが、やがて華麗な山車に変わってゆく過程は、大津祭曳山と似通っている。しかもからくりを曳山に摂取している点でも共通している。名古屋を中心とする中京圏には、曳山からくりが多数残されているが、その成立は大津とほぼ同時期に始まったことになる。祇園祭にはない曳山からくりという新趣向は、大津と名古屋という離れた土地で同時に摂取されたのである。確かに曳山という形態は、京都祇園祭を意識したものだったかもしれないが、曳山は祭礼を盛り上げるものとして、各地域で独自に発生し展開してきたともいえる。そして、からくりも当時の町人達の人気を博した芸能文化だったのだろう。つまり、当時の人々が好んだからくりが、町人文化の粋を集めた曳山に昇華されたといえるだろう。このように近世都市祭礼は、町人文化の表象として様々な角度から分析してゆく必要があるのだ。

大津と名古屋の曳山成立事情について考えてみたが、今後も大津祭を軸に、各地の都市祭礼を比較しながら、様々な問題を考えてゆきたい。

（和田光生）

『近江名所図絵』より

8月の講座・講演会より

歴史博物館では、土曜講座・講演会・親子歴史講座・ふるさと大津歴史教室など、年間に40回程度の講座を設け、歴史学・美術史・民俗学・考古学それぞれの分野の知識の普及をはじめ、知られざる大津の史跡の紹介などに努めています。こうした講座には毎回高い関心をお持ちいただき、本年度は8月末日現在で17の講座を開講し、すでに延べ一、一二三名の方々にご参加いただきました。その活動内容について一部ではありますが、このコーナーで報告させていただきます。

8月10日（土）に開講した第39回親子歴史講座「昔の遊び道具を作る」では、安田真紀子氏（奈良大学文学部史学科鎌田研究室研究員）を講師として招き、江戸時代のおもちゃ「紙つばめ」を製作しました。紙つばめは、江戸時代の庶民生活史を研究する安田氏が、記録や絵画資料から復元したもので、竹ひご・細い竹筒・板・大豆・糸・紙といった自然の材料だけを使って作ります。作り方は、つばめの形に切り抜いた厚紙の中心線上に板と竹筒をつけて胴体にします。竹筒には片一方の端を真ん中あたりまで二股に割いて広げた竹ひごを通します。竹ひごの二股にした方にはそれぞれ短冊をつけて尾とし、もう片方の端は大豆に差してひごが竹筒から抜け落ちないように止めておきます。こうしておいて、つばめの背につけた糸を持って振り回すと、尾が風を切ってクルクル回転する紙つばめのできあがりです。

参加した30名の親子連れの中には、ナイフやキリなど慣れない道具の扱いに苦労した方や、つばめの尾がうまく回転しない方もおられましたが、講座が終わるころには、みなさんの頭のまわりで元気な紙つばめが飛び回っていました。

れきはくインフォメーション

10月

5 土 ふるさと大津歴史教室―田上の歴史をさぐる
○雁皮紙製作所―オランダ堰堤―真光寺―法林寺行者堂―正法寺ほか
9時～17時頃（バス1日コース）

6 日 企画展記念講演会 シーボルトの博物学
○様々な分野に及ぶシーボルトの業績とその広く深い造詣を紹介
13時30分～15時 講師 熊倉功夫（国立民族学博物館教授）

12 土 第41回郷土歴史講座 石山寺を歩く
○奈良時代創建の寺院石山寺、国宝多宝塔などを紹介します
10時30分～12時

26 土 ふるさと大津歴史教室―下阪本の史跡を訪ねて
○坂本城跡―東南寺―両社神社・酒井神社―真光寺―聖衆来迎寺ほか
9時～16時頃（徒歩1日コース）

9 土 第42回郷土歴史講座 考古学の最前線！―遺跡の発掘現場はこんな所―
○発掘現場を実際に見学し、遺跡発掘の手順を学習します
10時30分～12時 講師 須崎雪博（市教育委員会文化課主査）

〈第15回企画展・シーボルト生誕200周年記念〉
シーボルト家の二百年展
10月2日(水)～11月10日(日)

11月

16 土 ふるさと大津歴史教室―金勝山とその周辺
○栗東歴史民俗博物館―春日神社―大野神社（昼食）―金勝寺
9時～17時頃（バス1日コース）

23 土 第129回土曜講座 胎内文書の世界
○仏像をタイムカプセルに見立て、その内部に納置される胎内文書を県内鎌倉時代の像を中心に紹介します
13時30分～15時 講師 土井通弘（県立琵琶湖文化館学芸員）

12月

7 土 第130回土曜講座 鎌倉時代の寺院建築―新様式の伝来について―
○鎌倉時代伝来の建築様式、禅宗様・大仏様と従来の和様を比較検討
13時30分～15時 講師 成瀬弘明（元県文化財保護課専門員）

14 土 第43回郷土歴史講座 しめ縄を作る
○お正月にむけて、自分の手でしめ縄を作ってみます
10時30分～12時

※講師名を記していない講座は本館学芸員が担当いたします。
※いずれの講座もハガキにて、お申し込み下さい。

収蔵品紹介㉕

木造聖観音立像 一軀

九品寺蔵（本館寄託）

京町一丁目の九品寺より最近ご寄託いただいた仏像です。

像高一七二・四センチの等身大の立像で、腕や足先を除いた大半を檜の一材から造り、背面をいったん割り、内刳をおこなったのち、再び矧ぎ合わせる一木割矧造の技法によっています。残念ながら両臂から先と足先などが後補されていますが、根幹部はよく当初の姿を伝えています。

充実した体軀の表現や角を立てたロープ状の衣の襞の彫り、脚の間にみえる渦状の衣文などは、平安時代前期の風をのこすものですが、目が細く、全体として穏和な気分に満ちているところは少し時代が下ることを考えさせます。正暦四年（九九三）頃の作とみられる滋賀県甲西町善水寺の梵天・帝釈天像に作風が近く、本像の造立期も十世紀末頃でしょう。

九品寺は鎌倉時代の創建と伝えるので、本像のそれ以前の安置場所は不明ですが、あるいは園城寺（三井寺）関係の像であった可能性もあります。

（岩田茂樹）

大津歴博だより No.27
平成8年9月30日

大津市歴史博物館
〒520 大津市御陵町2－2 ☎（0775）21－2100